# 政治的價値と藝術的價値　マルクス主義文學理論の再吟味

平林初之輔

青空文庫

# 一

コペルニクスは地動説をとなえたが、それを統一的理論によつて説明するためにはニュウトンをまたねばならなかつた。ところが今日の小學生は萬有引力の公式を知つている。だからコペルニクスよりも二十世紀の小學生の方がすぐれている！

石造建築は木造建築よりも進んだ建築である。某々洋食店は石造建築である。法隆寺は木造建築である。だから、某々洋食店の建築は法隆寺の建築よりもすぐれている！

これ等の論理には矛盾がない。だがこの理論からひき出された判斷は、必らずしも私たちを首肯（しゅこう）せしめない。その理由は説明するまでもなく、誰でもちよつと考えて見ればわかることである。

ところが、次のような命題にぶつつかると問題はそれ程簡單ではない。

ダンテの作品にはプロレタリア的イデオロギイが含まれていない。シンクレアの作品はプロレタリア的イデオロギイに貫かれている。だから、ダンテの作品は、藝術的にシンクレアの作品よりも劣つている！

もしダンテがあまり古すぎるなら、これをトルストイとおきかえても、ユゴオとおきかえても、ストリンドベルヒとおきかえてもよい。

然り！　と或る人はこれに賛成して、答えるであろう。藝術作品の價値は、その作品のもつイデオロギイによつて決定される。プロレタリアの勝利のために利益をもたらすものにのみ藝術作品の價値がある！

否！　とある人は答えるであろう。イデオロギイは藝術作品の全價値を決定する要素ではない。そしてプロレタリアの勝利のために、貢獻するということは、藝術本來の性質とは沒交渉である！

この二つの見方は、最近、マルクス主義文學理論と正統派文學理論とを尖鋭に對立させたのみでなく、マルクス主義文學理論の陣營内に於ても意見の分裂を生ぜしめている問題の焦點である。他の藝術の場合はしばらくおいて、文藝作品の評價の基準についての最近の諸議論は、悉くこの問題を中心としてまき起されているように思われる。

かような簡單な問題が、どうして、それ程多くの議論を生むに至つたかは、多くの人々には全く不思議に思われるであろうが、それにも拘らずこれは事實なのである。

私は、この不思議は、マルクス主義作家若しくは批評家は、彼がマルクス主義者であると同時に作家であり批評家であるという二重性のために存するのだと考える。マルクス主義者が文學作品を評價する基準は、あくまでも政治的、教育的の基準であり、作家若しくは批評家が文學作品を評價する基準は、藝術的基準である。この二つの基準を調節し、統一しようという試みに於てマルクス主義批評家若しくは作家の、新しい努力が生れ、そこにさまざまな意見の分

裂が生れたのである。大衆文學の問題の如きもその一つのあらわれに過ぎない。

マルクス主義は、單なる政治學説でも、經濟學説でもなくて一の世界觀である。若しそういう言葉を用いてもよいならば一の哲學である。從つて、それは、人間界の凡ゆる現象に對して、統一的な解釋、「見方」をもつべきものであることは無論である。だが、この「もつべきものである」ということは、現實に、完成された姿でそれを現在もつているということとはちがう。マルクス主義者の任務は、一の完成された法典を與えられて、凡ての事象を、それに照らして判斷してゆく司法官の任務とは全く異つて、この法典を日常の闘爭を通じて自らつくつてゆくことであるのである。文藝作品の評價というような問題については、無論私たちはまだ「原理はもうできあがった。あとはその應用のみである」という風な完全な法典を現在與えられておらぬし、また未來永劫そういうものの與えられる氣遣いはないであろう。それは單に、すぐれたマルクス主義者には、もつとほかに重大な仕事があるからという理由からばかりではなくて、問題の性質上與えられ得ないのである。

ところが、ここに一群の人々がある。それ等の人々は、この政治的價値と藝術的價値とは二つの直線のように、全く重ね合わせることができると考えるのである。勝本清一郎氏はそれを「社會的價値」という名前で呼んでいる。そして社會的價値は同時に藝術的價値であり、社會的價値のほかに藝術的價値ありと思うのは一の迷妄であるとして、藝術的價値というものを全く解消してしまつた。藏原惟人氏も、この一元觀に關する限りに於いては勝本氏と同意見であ

るように思われた。

（註）　勝本氏の三田文學に於ける、及び藏原氏の朝日新聞に於ける論文をさすのであるが、いまそれを參照しているひまがないので、私の讀みちがいであつたら、兩氏にお詫びする次第であるが、私のこの論文は兩氏の議論と獨立によまれても些しも理解を妨げるものではない。

マルクス主義は一の世界觀ではあるけれども、最もさしせまつた目的としては、組織されたプロレタリアによるブルジョア政權の奪取という政治の一點に、プロレタリアの凡ての力が集中されることを要求する。だから文學、藝術もこの政治的目的を達するための手段とされねばならぬのである。文學作品は、この視角から見たとき、直接間接の宣傳もしくは煽動（せんどう）の手段としてしか意味がない。これは、政治的に全く正しい解釋である。だから、マルクス主義政黨の藝術に關するプログラムに於て、藝術作品の價値は、それがプロレタリアの勝利に貢獻する程度の大小によつて評價されねばならぬと規定されることは甚だ當然である。そして、黨は、黨員たる作家や批評家に、その趣旨を傳達し、また命令することも當然である。藝術は手段ではないとか、文學は宣傳の道具ではないとかいうことを、藝術や文學の立場から絶叫したつて無益である。プロレタリアの解放、勝利ということが絶對だからである。

マルクス主義批評家にとつての作品評價の根本規準は、それ故に純然たる政治的規準である。

マルクス主義作家及び批評家はまずこの規準を認めなければならない。彼がどんなにすぐれた批評家や作家であつても、この根本規準を拒絶する刹那に、彼はマルクス主義作家でも批評家でもなくなる。何となれば、彼は藝術家であり、批評家である以前にマルクス主義者でなければならぬからである。藝術的價値は、彼にとつては政治的必要に從屬せしめられねばならぬからである。

實際の作品、たとえばチェホフの作品を例にとろう。チェホフがすぐれた作家であつたことはほとんど異論のない事實である。だが彼の作品は、革命の擁護という政治的必要からは、好ましからぬ作品であるかも知れぬ。若しそうである場合には、彼の劇がマルクス主義批評家によつて手嚴しく批難され、その上演がプロレタリア國家權力によつて禁止されることはあり得る。そしてこの禁止は、政治的に全く正當である。だが、この政治的形勢の變化によりて、國家權力の命令や、政黨の決議によつて、チェホフの作品の藝術的價値が、一夜のうちに消えてなくなつてしまうであろうか？

否！　と私は答える。また誰だつてそう答えざるを得ないと私は考える。チェホフの作品でなしに、たとえば、ボオドレエル若しくはエドガア・アラン・ポオの作品を例にとろう。これ等の人々の作品は、プロレタリアの勝利に貢獻するような何物をももつていないことは誰しも異存のないところである。それどころか、これ等の人々の作品には、一般に人類の幸福をおしすすめる拍車となるようなものすら何一つ見當らぬ。それにも拘らず、これ等の作家は、藝術

的に何等價値のない作家であるといわれるだろうか？　これ等の作家によつて描かれた頽廢性、不健康性はプロレタリアの闘爭のためには無論のこと、一般に人類の向上進歩のためにすら反效果をもつものであるのに、私たちが、それ等の作品に、多かれ少なかれ藝術的價値を認めるのは何故であろうか？

ここに一元論をもつては解釋しがたい謎がある。

性急な讀者は、私がここで、藝術作品の政治的價値を否定、若しくは減弱しようとする意圖を抱いているために、こういう議論をするのだと考えるかも知れない。ところが、私の意圖はその反對である。私は文學作品の政治的價値を正しく認識するために、そしてその重要性を立證するために、先ずこれを藝術的價値から引きはなすのである。若しこれを一しよくたにして「社會的價値」という風呂敷の中にひつくるめてしまうことができるならば、プロレタリア文學とかマルクス主義文學とかいうものの特殊性は消滅してしまわねばならぬ。

プロレタリア文學若しくはその別名或はその一部分としてのマルクス主義文學は、政治的規定を與えられた文學である。政治のヘゲモニイのもとにたつ文學である。この事實はあいまいにごまかしたり、糊塗したりしてはならない。藝術や文學から出發して、マルクス主義文學、プロレタリア文學を合理化しようとする企圖はきれいさつぱりと抛棄されねばならぬ。マルクス主義は藝術や文學を社會の現象として解釋することはできるが、藝術や文學はマルクス主義から命令され規定されて、政治的闘爭の用具となる約束を少しももつていないからである。プ

ロレタリア文學若しくはマルクス主義文學のみがそれをもつているに過ぎないのである。プロレタリア文學は藝術の立場ではなくて政治の立場から、文學論からではなくて政治論から出發してのみ合理化されるのである。

この關係は、ルナチャルスキーの場合ですら、粉飾され、婉曲に言いあらわされ過ぎていると私は思うのであるが、若しこの關係が明白になれば、プロレタリア文學の存在理由が少しでも薄弱になると思うなら、それは甚だしい誤解である。というのは非常に簡單な理由からである。即ち、私たちは、階級と階級とが、抑壓者と被抑壓者という形で對立している社會をそのままにしておいて文學をたのしむよりも、一時文學そのものの發達には、多少の障碍となつても、階級對立を絶滅することを欲するからである。他の一切を犧牲にしても、切迫した政治的必要を滿すことを欲するからである。このことはブルジョア文學の發生の場合にも完全にあてはまる。ブルジョア階級が、その覇權へむかつて進出したときの行進曲として、政治的文學をもつたこと、そしてブルジョア革命のまつ最中には、歷史的に見れば一時文學の衰頽期を現出したこと等が、それを語つている。ブルジョア文學は、愛と平和との中に、靜かな朗らかなクラリオネットの音の中に發育したものと思うのは大間違いで、血と鬪いとの中から戰いとられたものである。

そして勃興期のブルジョア階級によつて、血によつて戰いとられた文學が、國民文學として、成熟期のブルジョア階級の手で、まるで、平和と愛とのシムボルのように祭られているのであ

る。ゲエテ、シルレル、ユゴオ等々がそれである。勃興期のブルジョアジーは、一つの階級でなくて人類を代表していた。その故にこの時期の文學は人類の文學となり、國民の文學となり得たのである。というのはプロレタリアが、階級としてはつきりと對立して來たのは、そしてブルジョアジーがその階級的性質を露骨に示して來たのは、それ以後の出來事だつたからである。この意味に於いて、勃興期のブルジョア文學は、ブルジョアジーによりも寧ろより多くプロレタリアに屬している。（メーリンクのレッシング論はこの點で私の主張を裏づけるであろう。）序でに一言しておけば、日本の國民は國民的クラシックの名に値いするような作家や作品をもつておらぬ。紅葉、露伴、逍遥、蘆花、漱石、獨歩――これ等の作家のうちで、これこそ近代日本を代表する作家であるといえる人はない。それは偶然日本に天才的作家が現われなかつたことにもよるであろうが、いま一つは、日本のブルジョアジーが十分革命的階級としての闘爭を經過しないで、封建的勢力と妥協して、その庇護のもとに發達して來たからである。

## 二

プロレタリアの勝利のために貢獻するということが、マルクス主義文學の評價の基礎とならねばならぬことは上述の説明によりて明かになつたと思うが、マルクス主義文學も、文學である以上それだけでは不十分である。共産黨宣言が最もすぐれた藝術品であるとは言えないから

である。

そこで、この根本原理に附隨する、さまざまな小さい原理が必要になつて來る。たとえば、文學作品はただある政黨の綱領を解説するようなものではなくて、新しい何物かを創造していなければならぬとか、或は、或る觀念を露骨にあらわした作品はよくない作品であるとかいう種類の小さい原理がそれである。これ等の諸原理はマルクス主義にも、政治にも關係のない、一般に藝術そのもの、若しくは文學そのものに關する原理である。ここに於いてルナチャルスキーのテーゼは、そして一般にマルクス主義的文學の理論體系は、かくの如く二つの部分——政治的部分と藝術的部分とから成立しているのであることがわかる。しかもこの二つの部分はいい加減につきまぜてあるのではなくて、政治的部分が絶對上位に立ち藝術的部分は下位にたつという風に結合されているのである。この結合のしかたをかえることはマルクス主義文學の名に於ては許されないのである。

このことは多くの實際問題に關聯している。たとえば、政治的原理と藝術的原理とを同じ平面に並べて、双方に同じ價値をもたせようと企てるとき、そこに折衷的理論が生れる。ある作家の或る作品は、闘爭的精神も、階級的イデオロギイも稀薄であるが、藝術品としては立派な作品であることがあり得る。だがこの場合、如何なる藝術的な價値をもつてしても、マルクス主義文學である限り、闘爭的精神の缺如の埋め合せにはならぬであろう。第一義的な、根本的なものを缺いている限り、それはマルクス主義文學の作品としては低く評價されねばならぬで

あろう。

又或るマルクス主義者、たとえばトロツキーが、政治的には全く價値のない詩をつくつたとする。河上肇博士が、花か蟲かを見て政治と沒交渉な俳句を一句詠んだとする。この場合、トロツキーや河上博士がマルクス主義者であるがために、それ等の人の作品が、すべてマルクス主義文學の作品であると考えるのは全くあやまつている。況んや、或る作家が、マルクス主義的藝術團體に加盟したら、その作者の前日までの作品はすべてブルジョア文學作品であつたのが、その翌日からとんぼ返りして、悉くマルクス主義的文學作品になるなどと考えるのは全く子供らしい考えかたである。マルクス主義の立場からする文學批評は、常に、先ず政治的見地からされねばならぬであろう。この意味に於いて政治的意識の弛緩（しかん）は、マルクス主義文學作家にとつては致命的である。「イデオロギイはあやふやになつたけれども、技巧に於いてはすぐれて來た」というような評語は、マルクス主義作家にとつては少しも名譽ではない。それは一の藝術家としては、その作家が前進したことを意味するけれども、マルクス主義者としては後退したことを意味するからである。

だが問題はそれだけでつきるのではない。以上はマルクス主義作品に對するマルクス主義批評の關係について言つたのであるが、マルクス主義批評は、マルクス主義作品ではない、廣く一般の文藝作品に對してどんな態度をとるべきであるか？

嚴密に言えば、非マルクス主義作品の政治的價値は、マルクス主義的評價によれば零（ゼロ）であり、

反マルクス主義作品の價値は負になるわけである。たとえば「古池や蛙とびこむ水の音」という芭蕉の句は、マルクス主義的評價によれば、價値は零であると見なさねばならぬ。然るにすべての作家はマルクス主義者であるとは限らないのであり、マルクス主義の何たるかを全く解しない作家が澤山ある。

この場合、マルクス主義批評家は、嚴密にその機能をはたそうと思えば、これ等の作品に對する評價をさし控えねばならぬ。そして嚴密には批評家という立場をすてて、分析者としての立場にたたねばならぬ。プレハーノフやレーニンの「トルストイ」評には、多分に（全くではないが）分析者としての姿が現われている。若しこの場合に、政治的な尺度をすててしまつて、ただの表現や形式の批評だけをするならば、その時、この批評家は、マルクス主義的批評をしているのではなくて、ただの文藝批評をしているわけである。

更に一層進んで、反マルクス主義的思想を強くあらわした作品に對しては、マルクス主義批評家は、ただその作品にあらわされた思想と戰い、その誤謬を指摘し、克服することに全力をつくさねばならない。そしてそれ以外のことに關心する必要は少しもない。もしかかる反マルクス主義的作品の美に心ひかれ、その藝術的完成に恍惚とするのあまり、それを賞揚するなら、マルクス主義者はそこに退場して、ただの文藝批評家と交替したと解釋しなければならぬ。

私の説明はあまりに機械的であり、非實際的であつたことを私は知つている。だが、それは、私が原則的な理論を説明したのだからに外ならぬ。原則を説明する場合には、最も典型的な、

從つて最も極端な實例をあげるのが理解に最も都合がよいのだ。

最後に私は、私自身の、所謂（いわゆる）「懷疑的」立場を便利上逐條的に明かにして大方の教えを乞うことにしよう。特に私の最も尊敬する藏原惟人、勝本清一郎の兩氏に私は教えを乞いたいのだ。

先ず第一に現在のマルクス主義文學理論に對して、懷疑的態度をとつているという事實を告白しておく。（だが念のためにことわつておくが、私は何から何まで眞理を疑いたがるスケプチックではないのである。懷疑家という言葉が、スケプチックの譯語になつているので、誤解されることを恐れてこのことを一言しておくのである。）

第二に、私はマルクス主義の一般理論に對しては私の知るかぎりでは（それは非常に狹いのであるが）懷疑的態度をとつているわけではない。私は、マルクス主義と文學作品の評價との關係の問題に對して懷疑的態度をとつているのである。ここでも私は一言しておきたい。というのはかような新しい、未解決な問題に對して疑いをもつことは、一般に理論家にとつて已むを得ないことであり、それは惡いことではなくて、却つて望ましいことであり、反對にあまりにはやく不完全なオーソドックスを定立することこそ避くべきことであると私は思うのだ。

第三に私は前に長々しく述べきたつた政治的價値と藝術的價値との二元論を脫することができない。尤もここでもことわつておかねばならぬことは、「藝術的價値」という言葉であるが、これを私は神祕的な、先驗的なものだとは解してはいない。それは社會的に決定されるものだと信じている。ただマルクス主義イデオロギイや、政治鬪爭と直接の關係をもたぬと信ずるま

でである。

第四に、それにも拘わらず、私は文藝作品を批評するにあたつて、私の解釋するような意味の純然たる政治的評價にのみたよるわけにはゆかない。このことはマルクス主義の一般的理論の眞實性を認めた上でのことである。マルクス主義の眞實性を認めながら、私は非マルクス主義作品のもつ魅力にも打たれる。そしてその魅力に打たれる以上はそれをありのままに告白するより外はない。この點が最も重要なのであるが、若し私の言つたことが眞實であるならば、政治的價値と藝術的價値とは遂に「調和」し得ないと私は信ずるのである。兩者を統一する藝術理論はあり得ないと信ずるのである。マルクス主義文學理論は兩者の統一ではなくて、政治的價値に藝術的價値を從屬せしめ、これをそのヘゲモニイのもとにおかんとするものである。兩者は力で、權威で結合せしめられるのである。

若しそうであるならば、私は、現在のマルクス主義藝術理論は、一つの政策論であり、政治論であつて、藝術論と名づくべきものではないと信ずる。だから、幾分寄木細工的な感ある現在のマルクス主義藝術論を解體して、政治的部分と藝術的部分とに還元し、これを明白に規定しなおす必要があると思うのである。もしマルクス主義藝術論が、完全な藝術論であるならば、ファシズム藝術論も、イムピリアリズム藝術論も同じ權利をもつて可能なわけである。久野豐彦氏が、マルクスの代りに、ダグラスをひつぱり出して來たことも亦當然認められねばならぬ。そして藝術の評價は、藝術と關係の少ない、千差萬差の尺度をもつて行われねばならないこと

になる。だが藝術評價の尺度が觀音様の手のように澤山あるということは、藝術作品の評價が不可能だということとかわりがない。

これに反して、マルクス主義者は、政治的尺度によりて藝術作品の對社會、對大衆的效果を評價するのであるとすれば、この問題は至極簡單明瞭に解ける。これは政策論である。だが、人類の幸福のための政策論を、藝術の名によって拒むことはできない。

これを要するに、マルクス主義藝術運動は、藝術に關する定義の塗りかえや、藝術的價値と政治的價値との機械的混合によりて行われるわけには決してゆかない。それは飽くまでも政治のヘゲモニイのもとに行われる運動であり、政治によりて藝術を支配する運動である。この關係は政治と藝術との辨證法的統一というようなあいまいな言葉で説明してうつちやつておくべきものではない。先ず一應兩者を區別し、それを當然そうであるべき關係におかねばならぬ。

從つて、マルクス主義文學は――少なくもプロレタリアの勝利のために貢獻するという意味に於けるマルクス主義文學は――一定の時期において、その特殊性を自然に失つてしまうべきものであることは自然の理である。そのためにマルクス主義文學の價値が減弱するものではないことは、もう一度繰り返していうが、勿論であるけれど。〔昭和四年三月「新潮」〕

# 青空文庫情報

底本：「日本現代文學全集69　プロレタリア文學集」講談社
　　1969（昭和44）年1月19日初版発行
初出：「新潮」
　　1929（昭和4）年3月
入力：田中亨吾
校正：大野裕
2000年10月20日公開
2011年4月14日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

政治的價値と藝術的價値　マルクス主義文學理論の再吟味

平林初之輔

2026年10月1日　第二版

## 奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/